

大島北高等学校 聞き書きノート第11号

# シマ（集落）に学ぶ

～奄美の社会・文化遺産の継承～



大島北高マスコットキャラクター

「キタクツカル」

2026年2月  
大島北高等学校  
聞き書きサークル



中山清美先生

# 目 次

巻頭言	・・・ P. 1
序 今年度聞き書き調査実施概要	・・・ P. 2
本章 聞き書き活動報告	
1 里集落	・・・ P. 3～
2 宇宿集落	・・・ P. 8～
3 用集落	・・・ P. 15～
4 土盛集落	・・・ P. 22～
5 万屋集落	・・・ P. 26～
新聞掲載記事	・・・ P. 33
あとがき	・・・ P. 34

## 巻頭言

『シマ(集落)の宝』

聞き書きサークル活動へのメッセージ

鹿児島県立大島北高等学校

校長 有川 美智代



高校生が地元の長老や名人宅を訪ね、地域の文化や昔の生活の話を聞き、それを文章に起こす『聞き書きサークル活動』も、お陰さまで12年目、冊子の発刊はコロナ禍で未実施の2022年度を除いて11回目となります。

この活動は、平成26年に本校OBでもある元奄美博物館長中山清美先生(故人、平成28年ご逝去)の呼びかけで始まったもので、北大島地区の貴重な文化遺産を後世に受け継ぐ地域課題解決型の文化継承活動として高く評価されています。

さて、これまでの『聞き書きサークル活動』は、奄美大島北部のかつての風景や人々の暮らし、特に伝統や文化などを中心に書き残すことを行ってきました。

特に一昨年度は、奄美群島本土復帰70周年ということもあって、戦時中から米軍占領下の本土復帰運動の時期までを中心に聞き取りを行いました。

昨年度は、第10号の発刊「記念号企画」として、調査対象を北大島地区から範囲を広げ、奄美市名瀬地区で実施しました。また、この活動に参加した卒業生へのインタビューも掲載したところです。

本年度は、活動の原点に戻り、北大島地区5カ所(里・用・土盛・宇宿・万屋)にて聞き取りを行いました。

今回は2年生7人、1年生4人が調査員として、公民館等でインタビューをし、合計14人の話者の方々にお集まりいただきました。初めは緊張でうまく話せない生徒もありましたが、話者の皆様のお気遣いで和やかな時間になりました。

この経験は、生徒たちにとって、大きな糧になります。地域の先輩に、自分がまだ生まれていない時間の話を聞く。そこからの学びは、何にも代えがたい財産になると信じています。

最後に、『聞き書きサークル活動』にご協力して下さった話者の皆様、並びに話者の選定等にご尽力して下さった笠利総合支所・地域教育課課長補佐の永井様、各地域の区長様など関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

本制作物が奄美大島北部の歴史・伝統の継承に活用され、本活動が今後も発展するよう頑張っていきたいと思います。

## 序 今年度聞き書き調査実施概要

### 1 目的

- (1) 奄美の貴重な社会・文化遺産を後世に受け継ぐ。
- (2) 奄美の良さや課題等を発見・考察することで、自分の進路や将来に生かす。

### 2 調査実施要領

- (1) 日時 令和7年7月 25日(金)午前
- (2) 調査場所,話者等 \*氏名は敬称略

班	集落名	調査場所	話者氏名	区長氏名
A	里	里集落学舎	恵 知津子, 松下 勝代, 匿名希望	禰 敏郎
B	宇宿	宇宿公民館	濱崎 哲孝, 久保 一子, N・F, 箕輪 忠一	濱崎 哲孝
C	用	用体験交流館	榊 幸男, 安田 順一, Y・T	関 勝文
D	土盛	土盛公民館	山口 直, 山下 幸雄	平江 誠司
D	万屋	万屋生活館	肥後 安美, 岩山 ナス代	白内 政也

- (3) 調査員等 \*氏名は敬称略

#### ア 調査員(希望者)

2年A組 岩切 陽奈乃, 植田 玲央, 大山 結人, 奈良 歩美,  
肥後 祥樹, 福山 心, 村山 結

1年A組 登山 百々, 元 一栞, 藤崎 涼介 C組 朝 陽菜

#### イ 引率者(本校職員)

高山 裕司, 秋元 聖, 柳田 亜矢, 猪野 直樹

## 本章 聞き書き活動報告

### I 里集落

話者: 恵 知津子

(めぐみ ちづこ)さん

松下 勝代

(まつした かつよ)さん

匿名希望



調査員: 村山 結, 肥後 祥樹(以上2年)

**Q1** シマ(集落)で暮らして最も楽しかったり嬉しかった事は、いつ頃どんな事でしたか？

- ・ バナナ木で先輩が作った船を前田川で乗って遊んだこと。当時川に堤防はなかった。
- ・ 先輩たちと10人位で夜に集まり、夜中の2時位まで料理を交わして遊んだこと。(せっくわてらわし) せっくわ(酒)てらわし(けんか)
- ・ 里集落の神社は昔、今よりも上方にあって、その高台で木の小屋を作って遊んだこと。
- ・ 地豆拾いや飴食い競争を集落の運動会でしたこと。地豆は、落花生を海の砂の入った鍋で焼いたもの。飴食いに使用した黒飴は自分たちの家で作っていた。当時は食糧難で食べられるものも少なかったため、このような行事が楽しみの一つだった。
- ・ 前田川でタナガを捕り、下の兄弟たちの面倒を見ながら食べた。
- ・ 中学3年生の途中で給食が始まり、そこで出てくる給食のパンが楽しみだった。いつも食べる弁当は麦やイモばかりだった。
- ・ 4,5歳の頃に寺子屋に通っていて、その時はみんな裸足だった。あった靴はゴム製のもの。親が靴を作ってくれる家庭もあった。
- ・ 山に野イチゴを採りに行って食べたり、黒檀の実を食べたりしていた。
- ・ 台風のときは複数人でミカン拾いに行った。風で落ちるミカンを拾うが、許可を取らずにしたため、住人に見つかって怒られた。
- ・ 昭和26年頃、外金久でクジラがあがり、集落中に人が集まり、クジラの解体を行った。クジラを炊き込みご飯にした。
- ・ 家畜の豚を塩漬けにして食べた。一度で一年分作っていた。
- ・ にわとりはごちそうだった。夜は木の上で寝ており、今のにわとりよりもよく飛んでいた。
- ・ 沖縄に修学旅行にいった。貧しい人もみんな一緒に行けるように、稲刈りやダム建設の工事の石運びを体育の時間にして、旅費をみんなで工面した。

Q2 シマで暮らして最も辛かったり苦しかった事は、いつ頃どんな事でしたか？

- ・ 小中学生の頃は水道がなく、一日に5,6回, 山に水を汲みに行っていた。(北高付近, 外金久学舎付近, 中学校の高台付近)
- ・ 兄弟と喧嘩をしながら, 川で洗濯していた。(みんなで集まってしていたから, 苦しいというよりも楽しいという感情の方が大きかった。)
- ・ 家が貧しく食べ物もあまりなかった。
- ・ 学校にいた猿にあげたキャベツのことを「タマナ」と言った時, 方言を使ったと告げ口をされた。
- ・ 小学校で方言を使うと, 「私は方言を使いました」と書かれた首掛けをつけられた。方言は使わないようにしようという学校の決まりだった。



赤木名集落の地図。図の右下に「大島実業高校笠利分校」(北高の前身)とあることから、昭和39~43年(今から57~61年前)の地図と思われる。北高の敷地内に神社があったようだ。集落の中心部に映画館が2箇所あり, 店も多く見られ, 活気があったであろう。また, 集落周辺の山麓に水くみ場が4箇所見られ, 当時の人々の生活に重要な役割を果たしたであろう。

**Q3** 外から見たシマのいいところと悪いところ

<よいところ>

近所の人たちとのつながりがあるところ。

県外に住んでいた頃、子どもが病気になった時に住んでいたアパートの2階に、たまたま住用の方がいらして、子どものお世話をして下さいました。

<悪いところ>

中学生の頃はみんな歩いて登校していた。

(用安の人たちは1時間かけて歩いて来ていた)

昔は名瀬までバスやトラックで2,3時間かかった。名瀬に朝潮太郎(力士)が来るということでトラックの荷台に乗って行ったが、髪が砂ぼこりで白くなった思い出がある。

**Q4** シマは戦前後と現在でどう変化しましたか?逆に変わっていないものはありますか?

<変化したもの>

昔,富国製糖の近くに来賓館  
などがあった。

<変わっていないもの>

あまりない。



**Q5** シマで後世に伝え残したいもの、残って欲しいものは何ですか?

- ・ 伝統行事や島料理, 方言など。
- ・ 伝統行事。その一つの種下ろしは, 朝まで二日間, 飲んで食べて踊ったりしていた。

**Q6** 島口についてどう考えますか?他集落との島口の特徴の違いはありますか?

島口を使うと親近感がある。地区で言葉は違うが通じる。

**Q7** 高校生や聞き書き活動への要望はありますか?(若い世代への要望等でも可)

- ・ 北高を残してほしい。(合併などしないでほしい)
- ・ 今は集落到に近い場所に移動されているが, 神社を昔の場所に戻して整備してほしい。
- ・ 聞き書きサークルなど, 地域のことを知る活動をこれからも続けて行ってほしい。

## <調査員所感>

○村山 結(2年)

私は里集落の3名からお話を聞いた。自分の育った場所での活動だったこともあって、知っている方も数名いらっしまった。

今回の活動の中で出てきたシマでの暮らしの様子は、自分がどこか遠く昔の話だと感じていたようなことがたくさんあった。特に強くそう感じたのは、「もれん」と呼ばれる人々の話についてだ。多くの人が食糧難の状況にあった当時、物もらいとして集落の家をまわり、少しずつ食べ物を貰い歩いていた人がいたそう。現代の私たちのように十分な食べ物を手に入れることができず、他者から恵んでもらわなければいけない状況下にあった人たちが実際にいたという。その事実が、今から一世紀も跨がない過去にあった出来事だということに衝撃を受けた。その事が全く想像できなかったというわけではないが、実際に面と向かって話を聞くと、どうしても驚きが勝ってしまう。現代が過去に比べてどれだけ生きやすい世の中になったのかということ強く実感できた。

お話をしてくださった方々も、「今では考えられないことですが」という言葉をよく口にしていた。小学生の頃に、親が作った弁当を持ち、先輩たちと夜中の2時まで料理を交わし遊んだという話もあったが、これもその言葉通りのことだろう。約50年という短い時間の中で、こんなにもシマの生活は変わったようだ。

時代の流れは人が体感しているよりもはるかに速く、つい最近まで当たり前存在だったものもいつの間にか消えてしまっている。私は、今回の活動で知ったこのシマでの暮らしの跡を消えていくものにしたくないと思った。話をしてくださった3名も、この聞き書きの活動を是非続けて欲しいとおっしゃっていた。だから、話者の方々と同じように、私も今回聞いた話を口伝の形としてだけでもシマで暮らす人々へ広めていき、シマへの関心を深めるキッカケを作っていきたいと考えた。まずは、この北高をスタート地点としたい。



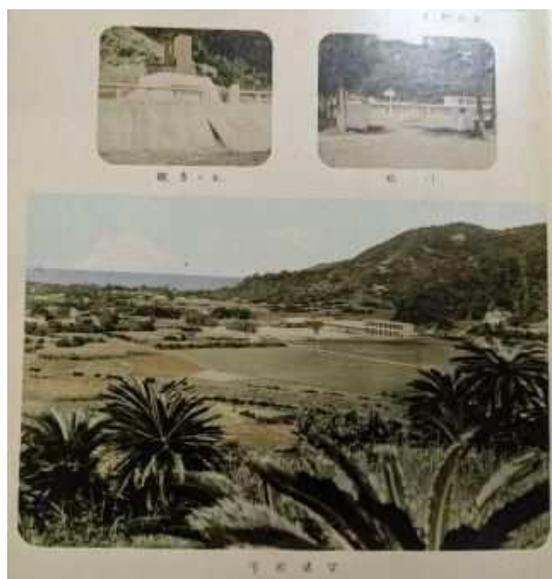
○肥後 祥樹 (2年)

私は、奄美で生まれ育ったが、中学3年生で初めて「種おろし」という行事を知った。まだ、私の知らないことも多くあるのだと気づいた。そこで奄美の歴史や文化を深く知りたいと考えた。教科書や授業で学べないお話を直接伺い、自分の言葉で記録することで、自分自身の学びにもなり、地域の魅力を再発見する機会にもなると考え、今回聞き書きサークル活動に参加した。

私は、里集落の3名の方々に話を伺った。今回、伺った中で印象に残った話は、シマの方言が地域ごとで違うにも関わらず、言葉が通じるということだ。

当時のシマでは、方言を日常的に使っていたが、中学校で方言を使うと「私は方言を使いました」と書かれた板を首にかけられていたそうだ。現在、方言は高齢者ばかりが使っている。奄美の大切な伝統を残すため、小学校や中学校では、島ロカレンダーなどを置くなどし、島の伝統を次世代に受け継ごうとしている。今回の活動を通して、私の知らない奄美の出来事を知ることができ面白かった。今回3名の方から話を伺い、昔の奄美の状況の人間関係や何があったかなどの内容を知れてよかった。

私は、今回の活動を通して、奄美大島の伝統や文化、奄美ならではの人のつながりなどを守り残していくために、地域行事などに積極的に参加して、多くのことを学び、奄美の未来のために引き継ぎ伝えられるようになりたい。



## 2 宇宿集落

話者：濱崎 哲孝(はまさき のりたか)さん 昭和27年(1952年)生 72歳

久保 一子(くぼ いちこ)さん 昭和28年(1953年)生 72歳

箕輪 忠一(みのわ ただかず)さん 昭和26年(1951年)生 73歳

N.F さん 昭和17年(1942年)生 83歳

調査員：奈良 歩美(2年), 藤崎 涼介(1年), 元 一栞(1年)

**Q1** 主な経歴を教えてください。

- ・ 県病院勤務, 現宇宿集落区長。(濱崎さん)
- ・ 小学校教員を経験, 喜界など奄美以外の島での勤務経験もある。(N.Fさん)
- ・ 島外で5,6年勤務し, その後奄美へ帰ってくる。八月踊りの名人。(箕輪さん)

**Q2** シマで暮らして楽しかったり嬉しかった事は, いつ頃どんな事でしたか?

- ・ 日本復帰前にクリスマスになると, アメリカ軍の人たちからクリスマスプレゼントをもらえたこと。
- ・ 日本復帰の瞬間を叫んで知らされたこと。
- ・ 崎原から万屋まで提灯を持って歩いたこと。
- ・ 重成格知事が奄美に視察に訪れる際に, 日の丸を使うことができなかつたので, 桜の花の絵に色を塗って列を作って出迎えたこと。(以上, N.Fさん)
- ・ 内地では味わえない集落の良さを体感できること。
- ・ 子どもの頃は川遊びなどで楽しんでいた。(以上, 箕輪さん)
- ・ 日本復帰の歌を歌いながら, 空港付近まで行進したこと。
- ・ 集落行事や八月踊りに参加すること。
- ・ 徳之島出身の横網朝潮閣の応援をしたこと。
- ・ 小学生や小さかった頃, 五穀豊穡のために野イチゴの葉に虫を包んで海に虫流しをしたこと。(以上, 濱崎さん, 久保さん, 箕輪さん, N.Fさん)



**Q3** シマで暮らして最も辛かったり苦しかった事は、いつ頃どんな事でしたか？

- ・ 戦後、生活水準が低かったこと。
- ・ 島外に比べて給料が低く、1日働いても250円ほどしかなかった。
- ・ 黒砂糖などは制限されていたこと。
- ・ 食料に限りがあったこと。(昔はキビを食べていた)
- ・ 島口を話さないようにしたこと。
- ・ 子どもも労働者の1人だった。(以上、濱崎さん、久保さん、箕輪さん、N.Fさん)

**Q4** 外から見たシマのいいところと悪いところ

<よいところ>

集落の伝統行事。昔と違って行事が少なくなっているが、まだ残っている行事がある。

<悪いところ>

- ・ 島内の人が島外に行く際に、八月踊りや種おろしを馬鹿にされているのを聞くのが辛かった。
- ・ 島の人が方言を覚えられない。
- ・ 勉強などで島外からくる大学生などが踊れるようになっていることに対し、島内の人が踊れないこともあること。



**Q5** シマは戦前後と現在でどう変化しましたか？逆に変わっていないものはありますか？

<変化したもの>

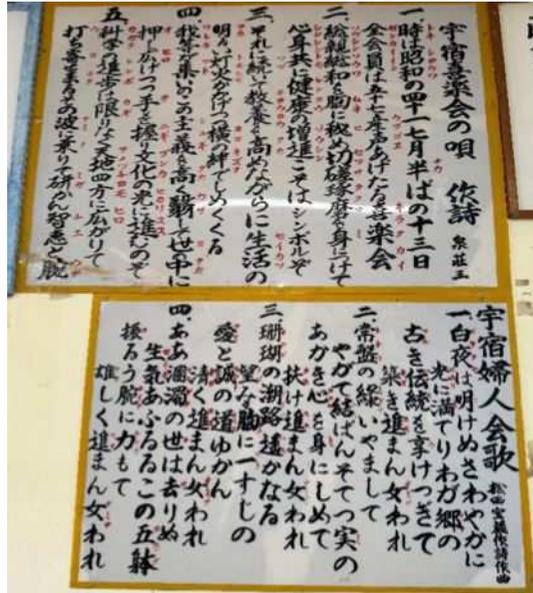
- ・ 八月踊りや方言の半分が変わっていった。
- ・ 若い人で方言を知らない人が多い。
- ・ 島を出る若い人たちが増えた。
- ・ キビ農家は昔多かったが、今では少なくなっている。
- ・ 外来種が入ってきていること。
- ・ 島口の使い方を間違えると先輩達が注意してくれたが、今では言われなくなってきた。

<変わっていないもの>

- ・ 伝統行事が少なくなっても継承されている。

Q6 シマで後世に伝え残したいもの、残って欲しいものは何ですか？

- ・ 伝統行事ができない状況にあるが、これまでの伝統として残してほしい。伝統行事も言葉も生き物であり流れていってしまうため、若い世代の人たちが今ある伝統を継承してほしい。
- ・ 八月踊りや六調などを保存していくこと。(復活させることの難しさを減らすため)
- ・ 人一人一人によって伝統行事や島口などを今後につなげていってほしい。
- ・ 島口を話す人が少なくなってきたことで、島の良さが薄れてきているので、話す人が増えてほしい。



Q7 島口についてどう考えますか？他集落との島口の特徴の違いはありますか？

- ・ 同じ笠利地区でもイントネーションやアクセントが全く違う。
- ・ 3,4年ほど前に島口かるたを使用して練習などをしていた。
- ・ 昔は島口を使う人が多かったが、島口に対して少しずつ制限をかけるようになってきたことは生活する中で不便になってしまった。
- ・ 戦後、方言が禁止されたことによって使用する人が少なくなった。禁止された理由として、島外に出る子どもたちが社会で困らないようにするため、奄美に対して大きな差別に負けないようにするためであり、週番の努力目標や使用した人に対して札を下げるなどの罰が与えられていた。
- ・ 家内では島口を使って会話できていたが、学校内で話すときには島口を使うことが認められなかったことなので、島口を使う機会が減ってしまった。
- ・ 宇宿では島口のことをシマヨモタと言っている。

**Q8** 島口を伝える中で大事にしていること

- ・ 奄美の歴史が詰まっています、なおかつ奄美そのものを表している。(原点)
- ・ 奄美の文化であること。
- ・ 郷土の成り立ちを理解できることで、島口の良さを知ることができること。
- ・ 小学生が作った標語を島口に変えてカレンダーにすることで、自分たちが作った標語の島口版をみて学べるようにしている。(宇宿集落で行っている取り組み)

**Q9** 高校生や聞き書き活動への要望はありますか？(若い世代への要望等でも可)

- ・ 聞き書き活動などに積極的に参加してほしい。
- ・ 笠利地区に限らず、いろいろな地域とコミュニケーションをとってほしい。

**Q10** その他(昔はこうだった!)

- ・ ソテツの葉っぱをくくって名瀬の業者に出せば、お駄賃としてもらっていた。この葉っぱはアメリカのクリスマスツリーとして使われていた。
- ・ 昔の小学校は2300人在籍していた。八月踊りの指導は地域住民の方々の協力を得て進めていた。



## <調査員所感>

○奈良 歩美（2年）

私は、今回の活動で宇宿集落の濱崎さん、久保さん、箕輪さん、Nさんにお話を伺った。4名全員、宇宿集落の出身で、小さい頃から現在までのたくさんのお話を話して下さった。

特に印象に残ったのは、伝統行事や八月踊りについての話だ。八月踊りは、9月に行われる奄美の代表的な伝統行事の一つで、アラセツ、シバサシ、種おろしの3回に分けられて行われ、集落内の家を踊って回るというものだ。この八月踊りも、昔と比べたらかなり変わったところがあるという。昔は宇宿集落の9割ほどの人が農家をしていたため、その仕事を休んで朝から夜まで踊っていたそうだ。また、その頃は踊りや、唄を教えてくれる人がいたが、今はなかなかいないという。また、昔と比べて行事への参加率が減ってしまったという。そのため、島口をしゃべれる人が少なくなったり、八月踊りの継承が難しいそうだ。私も自分が住んでいる集落の八月踊りに参加したことがあるが、踊りも唄も太鼓も独特なリズムだと感じた。特に唄は、標準語と違う島口なのと、最後に向かうにつれてテンポが速くなっていくので難しかった。

奄美が日本に復帰してからも、本土との差は大きく、生活水準が低かったり、賃金も1日で250円ほどしかなかったそうだ。また、箕輪さんは本土で働いていた際、標準語がわからず、島口も伝わらないため、最初の半年は、あまりしゃべらないようにしていたそうだ。Nさんも大島高校を卒業後、本土の学校に進学し、製鉄業の見学に行った際に差別を受けたことがあるそうだ。そのため、本土に行った奄美の人たちは、自分たちで自分の地元を卑下していたと久保さんはおっしゃっていた。

私はこの聞き書き活動に参加するのは2回目だったが、1回目の活動では聞けなかった話を聞くことができ、今とは全く違う暮らしの様子を聞いて、初めて知って驚くことが多かった。自分が住んでいる場所のことだけど、知らない人も多いと思うので、今日学んだことを広めていきたいと思った。



○藤崎 涼介(1年)

私は宇宿集落の久保さん、濱崎さん、箕輪さん、Nさんに話を聞いた。話を聞いたなかで印象に残っていることは2つある。

1つは、方言を話す人が減少傾向にあるということだ。戦後の学校では、方言を使うことが禁止されており、普通語を使用していたということだ。そのため、学校で兄に用事があったNさんは「学校以外での生活は主に方言を使用していたため、学校で兄に普通語で話しかけることは恥ずかしかった」と話す。また、同じ笠利地区でも話す速さやイントネーションが全く異なるという。他にも、方言を使用する人が少なかったため、方言を理解できない人が多かったということだ。

2つ目は、昔からの伝統行事や文化を受け継ぐ人が減少しているということだ。昔できていた伝統行事ができていない状況になったり、地域同士の交流ができていない現状があるようだ。また、伝統行事や島言葉の全ては生き物であり、触れないうちに絶滅してしまう恐れがあるため、若い人が行事に参加し、継承することも大事であると感じた。

私は、今回の活動を通して、奄美大島全体が抱える問題について深く知ることができた。特に現代では若い人たちの島外流出に伴う伝統行事等の継承の難しさや、島口と標準語のミックス、標準語を使う人の割合が増えてきたことによって島口本来の良さがなくなりそうになっていることに対して、話者たちの現代に対する切実な思いがひしひしと伝わった。

奄美大島の伝統行事や、島言葉を守っていくために、年輩の方々からお話を聞いたり、伝統行事やボランティアへの積極的な参加などをしていきたい。さらに、奄美大島の未来に向けた取り組みやこれまで残された伝統行事や文化を継承していきたい。



## ○元 一粟(1年)

私は宇宿集落の N さん,久保さん,濱崎さん,箕輪さんに話を聞いた。N さんは「家では方言で話すけど,学校では方言を使ってはいけないから,標準語で話すのが恥ずかしかった」とおっしゃっていた。現在では普通に方言を使っているが,当時の方言の使い方が全然違うことを知ることができた。その中でも特に印象に残ったのは,当時の人と違って,方言を使って話す人が年々減ってきているということだ。

現在はあまり方言を使って話さないで,若い世代の人はあまり方言を知らない人が多くいる。地域によっては少し方言の使い方が違ったり,標準語を混ぜて話している方言もある。若い人の多くは現在,標準語で話しているが,今の高齢者の人たちはもっと若い人にも方言を知ってほしいと思っている。3~4年前,宇宿集落の小学校には土曜授業の際に島口かるたをしていたが,方言でもイントネーションやアクセントが全然違うので,覚えさせるのにとても時間がかかり難しかったとおっしゃっていた。小学生でも方言を覚えるのが難しく,若い世代の人たちも方言を使う人が年々と減っているで,方言は絶滅しそうになってきているとおっしゃっていた。

私は,今回の聞き書きの活動を通して,奄美大島の伝統行事や集落行事,方言を知ることと人とのコミュニケーションを大切にしていくとともに,島の伝統行事や方言を守っていくために積極的に伝統行事に参加していきたいと思った。



### 3 用集落

話者氏名: 榑 幸男 (さかき さちお)さん 昭和 10 年生 90 歳  
安田 順一 (やすだ じゅんいち)さん 昭和 10 年生 90 歳  
Y.Tさん

調査員: 大山 結人, 福山 心, 植田 玲央 (以上2年)

**Q1** 主な経歴等を教えてください。

- ・ 大阪で就職→その後奄美へ (榑さん)
- ・ 高校卒業後, 関東の大学へ進学&就職→名瀬市内へ→用へ (安田さん)



**Q2** シマで暮らして最も楽しかったり嬉しかった事は、いつ頃どんな事でしたか？

- ・ 健康で元気に働くこと。海や畑に行ったり, グランドゴルフをしたりすること。(榑さん)
- ・ 八月踊りや浜下り, 舟こぎなどの「奄美らしい」文化行事。(安田さん)
- ・ 友達や地域の人と集うこと。また, 日本に復帰した時, 村の周りを万歳しながら歩き回ったことを鮮明に覚えている。(Yさん)

**Q3** シマで暮らして最も辛かったり苦しかった事は、いつ頃どんな事でしたか？

- ・ 本土との交流がなく, 閉鎖的であり, 教育レベルに大きく差があった。  
奄美は昭和 28 年までアメリカの支配下にあったため, 本土へ出るにはパスポートが必要だった。そのため, 本土への受験が大変だった。また, 復帰運動で勉強どころではなかった。(安田さん)
- ・ 本土や他の地区の情報が全く入ってこず, どんな世界があるのか全く知らなかった。

**Q4** 外から見たシマのいいところと悪いところ

<よいところ>

- ・『文明の光は射せど、文化は負けていない!』（安田さん）
- ・島唄や方言という奄美らしさ。（全員）

<悪いところ>

- ・言葉の訛りが消えず、恥をかいた。島口を馬鹿にされたり、差別されたりした。言葉が本土と違うため、沖縄や朝鮮人と間違われていた。（榊さん）
- ・大学のクラスメイトが「だいく」と言った時、「大工」と「ベートーベンの第九」を勘違いした。そして、交響曲の合唱を初めて聞いた時、世の中にこういうのがあったのかと感動した。それからクラシックが好きになった。東京に行ってすぐの感想が「何でも知ってやろう、勉強してやろう」。また、言葉の訛りは一切外では使わなかった。（安田さん）



**Q5** シマで後世に伝え残したいもの、残って欲しいものは何ですか？

- ・八月踊りを踊る人が減っている。若い人たちにも引き継いでいってほしい。（榊さん）
- ・鶏飯やミキなどの食べ物や、文化行事、歌、地域の踊り。（安田さん）
- ・戦後は方言をなくそうという時代があり、家では方言を使い、学校では標準語を使う言葉の二重性があり、方言を使えなくなっていったから、方言だけは絶対になくしたくない。→方言の例として、「彼と僕は親せきになる」を、用集落と佐仁集落の島口で紹介してもらった。（Yさん）

**Q6** 島口についてどう考えますか？他集落との島口の特徴の違いはありますか？

- ・大阪でも島の仲間たちとよく島口で話していた。小学5年位の頃から、学校で方言を使わないよう教えられるようになった。もし方言を使うと、札を持つとかなければならない。わざと方言を使わせて札のなすりつけあいをよくしていた。  
島口といっても地域によってなまりなどが全然違う。集落名の呼び方も島口だと今は違う。例として【用→ゆう】。（榊さん）
- ・後世に残していってほしい。なまりがなかなか抜けなかった。なまりは本土で大きく恥をかいた。

【瀬戸内→難しい 佐仁→(波風が強くて)ちょっと口強め 用→静かで優しめ  
戸口→あらめ 沖永良部→(地形的に山があるせいか)強弱はつきりめ  
住用→穏やか】

地域間の方言のアクセント、イントネーションの違いは、その地域の環境からくるのではないか。このようなそれぞれの地域らしさがとても大事。東京時代に読んだ徳川家康(山岡荘八さんの書籍)に書かれていた奄美や島口の紹介で、「黒砂糖は薬」、びんだれ【洗面器】、ちようずだれ【トイレの後手を洗う器】、ふぐり【金玉】。(安田さん)

- ・ 方言だけは絶対になくしたくない。当時、学校で方言を使うと怒られたので、家では方言、学校では標準語を使う二重生活だった。中学校の頃から島口の禁止があり、もし使ったらバケツを持って立っておかなければならないといった努力目標にもなっていた。(Yさん)

#### Q7 戦時中の天皇制について

- ・ 小学生の頃(戦前)、天皇を奉る奉安殿があった。そこに拝礼することが学校の一つの習慣になっていた。終戦までは日本は天皇制で、天皇が相当な権力を持っていたため、戦争が始まるかどうか天皇の直進によって決まるということもあった。「お国のため、天皇のため」という合言葉もあった。戦時中の国の教えは「天皇のために命を捧げよ!」「日本は神の国だから負けない、だから天皇のために頑張れ!」というぐらい天皇崇拝がすごかった。国家の教育が徹底していたため、国民も子どもも兵隊も全部そういった思想に染め上げられていた。



<奉安殿の前にて>

- ・ 日本は天皇を一つにまとめている国であった。そのためアメリカが日本を占領したときに、日本をまとめる天皇を生かしておこうということで皇居には弾一つ飛んでいなかったという。それぐらい当時、天皇は日本をまとめるために大事な存在だった。(以上、安田さん)

**Q8** 戦時中に体験したことは？

- ・ 小学校の頃、学校から帰る途中に B29 が飛んできて機関銃で射撃された。急いでサトウキビ畑に入り込んだため怪我はなかったが、そのまま歩いていたら死んでしまっていたかもしれない。早く終戦になってよかった。(安田さん)
- ・ 学校の屋根に機関銃が撃たれ、雷のような大きな音がした。(榎さん)



**Q9** 戦時中に衝撃を受けたことは？

- ・ 鹿児島から沖縄に行く知覧特攻隊の人が、途中で死ぬのが怖くなり、戦闘機片道のガソリンしかない状態で、用の砂浜に不時着した。軍人さんは飛行機が故障したと言っていたが、あれは後々考えると敵前逃避だったと思う。防空壕で、陸軍や海軍の軍人さんをもてなすとき、これらの軍人さんとは別の部屋に通して、子どもながら「なんでだろう」とあの時は感じていた。戦時中、敵前逃避は大きな罪だった。(安田さん)
- ・ 用と喜界島の間で日本軍とアメリカ軍が空中戦をしていた。そして、ほとんど先に落ちるのは日本兵の戦闘機であった。そんな風景も日常茶飯事で、生きた心地がしなかったが、当時はそれが普通になっていた。(安田さん)
- ・ 日清～太平洋戦争までの戦争で亡くなった方は、笠利町で596名、うち用集落では41名いらっしまったという。日清戦争が何名、太平洋戦争が何名という細かい情報は記録がないため分からなかった。(関区長さん)



<昔の風景 牛車に乗って>



<『結い』で集落総出で行う田の苗植え>

## <調査員所感>

○福山 心(2年)

今回、用集落の安田さん、Yさん、榊さんに話を伺った。安田さんと榊さんのお2人は90歳だったため、奄美の戦前や戦後の話を詳しく聞くことができた。

私は実際に戦争を体験していないのでわからなかったが、太平洋戦争を経験した人の話を聞き、今では考えられない当時の暮らしの様子を知って驚いた。特に学校からの帰り道に戦闘機から機関銃で攻撃された話は衝撃的だった。戦時中はいつ死んでしまうかわからなかったことを聞き、改めて戦争の恐ろしさを知った。今では考えられないが、当時はこの暮らしが当たり前だったようだ。戦争のない世の中が当たり前ではないのだと思った。

話を聞か中で私は、集落によって方言が変わることに興味を持った。用集落と反対側の佐仁集落とでは方言のアクセントやイントネーションに大きな違いがあった。10年以上奄美に住んでいるが、地域のおじやおばが話している方言の違いに気づかなかった。方言の違いを知って、他の地域の方言を聞いて比べてみたいと思った。

また、安田さんがおっしゃった「奄美は文明の明かりは差さないが、文化は負けないところがある」という言葉が印象に残っている。しかし、その文化も継承する人が少なくなっている。今回の聞き書き活動でも「若い人たちにも八月踊りを踊ってほしい」「方言はなくしたくない」などの声も聞いた。この聞き書きサークルを通して、地元の人々の体験や考えを聞き、私たちが多くの人に今の奄美の現状を伝えることで、奄美の文化をこれからも守っていきたい。

私は今回の聞き書きサークルで、「奄美らしさ」の大切さや奄美の文化の貴重性を学ぶことができた。本土にはない「奄美らしさ」を守っていくためにも、高校生の私たちにもできることを考えていかなければならないと思う。できることは限られるかもしれないけれど、地域の人と会話をしたり、博物館や図書館に行って資料を調べたりするなど、簡単なことから始めていきたい。また、これからもこのような活動を通して奄美について学んでいきたい。



○大山 結人(2年)

私は用集落の榊さん,安田さん,Yさんに話を聞いた。

私は奄美大島で17年間過ごしてきて,奄美の歴史を知った気でした。しかし,今回話をされた方々の話を聞いて,知らないことをたくさん知ることができた。その中でも特に印象に残ったのは,戦時中の奄美についてだ。

当時,奄美大島は沖縄県とともにアメリカの統治下におかれていた。そのため,今私たちの住む地域もアメリカ軍による爆撃を受けていたそう。今回話をしてくださった方々も,実際に爆撃を近くで経験していたという。また,日本復帰を果たす昭和28年までの奄美大島は閉鎖社会となっており,本土との交流もなかったため,文明の明かりは全くささず,本土と比べて食や教育レベルには大きな差があったそう。安田さんは東京の大学を受験した際に,教育レベルの差を実感して腰を抜かしてしまったそう。さらに,本土に上るためにはパスポートが必要だったため,本土への受験は難しかったという。そこで安田さんは「私たちの奄美は文明は遅れていたが,文化は勝っていた,奄美らしさが一番大切だ」とおっしゃられた。それから奄美の人々は日本復帰運動に励み,昭和28年について日本復帰を果たした。日本復帰の出来事は奄美の人々に大きな影響を与えた。Yさんは,そのころの奄美が小さな路地まで万歳する人たちでいっぱいだった光景がとても印象に残っているという。今の奄美は本土ともあまり変わりのない文明をもち,平和に暮らせている。これらは,これまでの奄美の人々が奄美らしい結いの精神や文化を守り続けて来たからこそあるものだと思う。しかし,今の奄美の文明は発達したが,文化は昔より衰えたと感じる。

私は今回の活動を通して,奄美大島の伝統や文化がいかに大切かを知ることができた。なので,これまで奄美を守ってくれた人々の思いを継ぐためにも,私たちの若い世代で奄美の歴史や文化の知識を大切にしたいと思う。また,地域行事などに積極的に参加して,奄美の宝物を守っていききたいと強く感じた。



○植田 玲央(2年)

私は今回、用集落に住むお三方に話を伺った。お三方はとても詳しく戦前の奄美での暮らしや、戦後の奄美、奄美を出た時の暮らしなどについて話して下さった。私は、今回の活動に参加するまで、戦時中の奄美のことについて何も分からなかった。しかし、お三方の話を聞いて驚くことや学ぶことが数多くあった。

現在の奄美と本土で情報格差があるのは知っていたが、お三方によると島内でも分からないことがあったという。更に、昔の奄美は閉鎖的だったのもあるが、今以上に知識が少ない環境下だったことが驚きだった。それでも、「奄美の文化には負けないものがある」という考え方をもたれていて、奄美を愛する島人の熱い思いが伝わってきた。

戦前の小学校には奉安殿があり、天皇を奉る場所があったという。このことにも驚きだが、国家の教育が徹底されていて、日本国民が「天皇のために命を捧げよ!」「日本は神の国だから負けない、だから天皇のために頑張れ!」という思想に染め上げられていたことに衝撃を受けた。今となっては、天皇は戦前のような権利は持っていないが、一人の意見だけで戦争ができてしまう国で生きることは震えが止まらないほど怖い世界だと感じた。

戦時中、知覧からの特攻隊が用の海岸に不時着していたという。当時の軍の敵前逃避は大きな罪になったそうだ。今ではとても考えられないことが戦時中に行われていたのだろう。

戦前・戦後の奄美での農業は、「結の作業」といって近所の人たちで協力して田植えをするなどして交流していたという。結の作業だけではなく、現在にも残る「浜おれ」や「種おろし」、「舟こぎ」などをして地域交流をしていたという。

私は今回の聞き書き活動を通して、日本が戦争をしていない時代に生まれてきたありがたさや、戦争の悲惨さを体験した方々の大変さを知った。大変な時代を生き抜いてこられたお三方の思いや考えを、昔の人たちが行っていた地域交流とともに後世にも残していきたい。



## 4 土盛集落

話者：山口 直(やまぐち すなお)さん 昭和9年生 90歳

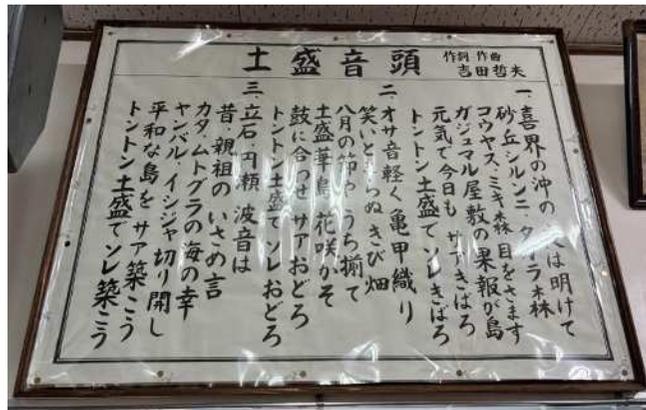
調査員：岩切 陽奈乃(2年), 登山 百々(1年), 朝 陽菜(1年)

Q1 主な経歴を教えてください。

- ・ 中学卒業後, 5年ほど大阪で勤務。帰島後, 名瀬の紬協同組合に勤務。
- ・ 現在三味線や島唄の先生として, 八月踊りなどの指導をしている。

Q2 シマで暮らして最も楽しかったり嬉しかった事は, いつ頃どんな事でしたか?

終戦後, 皆が帰ってきて, 子どももたくさんいてとても賑やかだった頃, 相撲や八月踊りなどの地域行事が青年団を中心にととても盛り上がっていたこと。



Q3 シマで暮らして最も辛かったり苦しかった事は, いつ頃どんな事でしたか?

- ・ 校舎がない時期は, 様々な公民館で授業を受けた。校舎はかやぶきで冬は寒かった。
- ・ 授業は農作業が多かった。
- ・ 山道を素足で通学するのが大変だった。
- ・ 大阪で働いていたころ, 方言をからかわれた。

Q4 外から見たシマのいいところと悪いところ

<よいところ>

- ・ 空気や風景が美しく, 海や山などの自然が素晴らしい。
- ・ 愛情深い人が多く, すぐに仲良くなれる。

<悪いところ>

- ・ 奄美のものを島内で守ろうという意識が欠けている。
- ・ 大島紬の技術も島外に流出し, 生産量や収入が減っている。

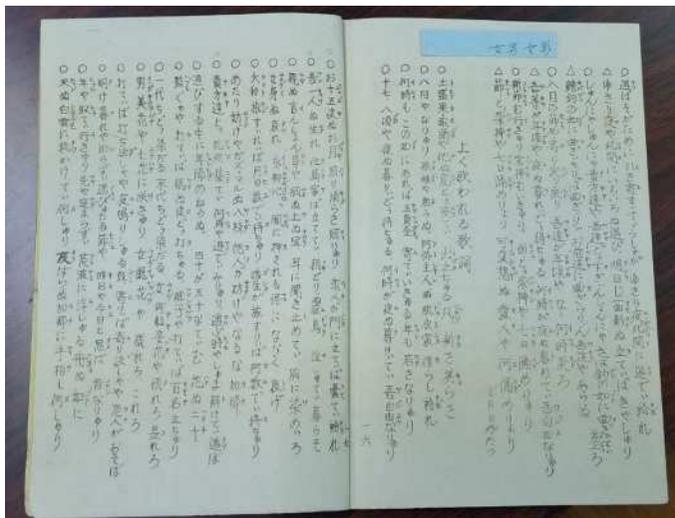
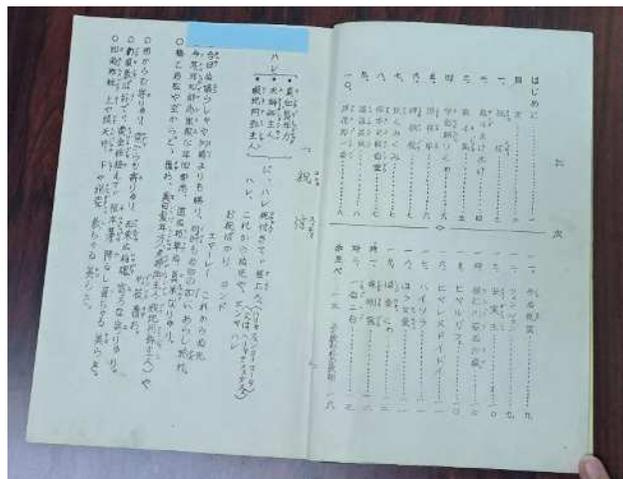
**Q5** シマは戦前後と現在でどう変化しましたか？逆に変わっていないものはありますか？

<変化したもの>

- ・ 田んぼがキビ畑に変わった
- ・ 富国製糖ができて収入が増えた。

**Q6** シマで後世に伝え残したいもの、残って欲しいものは何ですか？

伝統行事を残したい。土盛集落は地元の人が減り、島外から来た人が増えていて、後継者が減っている。さらに、八月踊りは島口がわからないと唄うことが難しくかったり、楽譜がなかったりなど伝えていくのが難しい面もあるが、大切な伝統を繋いでいきたい。



話者: 山下 幸雄(やました ゆきお)さん 昭和13年生 88歳

Q1 主な経歴を教えてください。

- ・ 大島高校卒業後、海上自衛隊、東京の会社で勤務。
- ・ 帰島後、笠利農協で定年まで勤務。
- ・ 現在農業に従事。



Q2 シマで暮らして最も楽しかったり嬉しかった事は、いつ頃どんな事でしたか？

- ・ 自分が小学校5、6年の頃は集落の人口も200人以上いて、子どもも多く楽しかった。
- ・ 以前は水道がなく、井戸を使っていたが、友人と井戸の深さを測ったりしたこともいい思い出になっている。

Q3 シマで暮らして最も辛かったり苦しかった事は、いつ頃どんな事でしたか？

- ・ 終戦後、給食がなく、家に帰って芋を食べていた。
- ・ 赤木名小学校に爆弾が落ち、神社や校長先生宅の庭で授業を受けたこともあった。
- ・ 中学校では校庭を作るために、砂を運ばなければならなかった。
- ・ 脱脂粉乳を飲んでいて。

Q4 外から見たシマのいいところと悪いところ

<よいところ>

- ・ 人情が素晴らしい。
- ・ 都会ではアパートの隣の人の顔も知らないというが、集落では家族同然の付き合いができる。結の精神が生きていて、自然と助け合いができる。

<悪いところ>

- ・ 仲がいいあまりに、個人的な事柄に入っていきこともある。

**Q5** シマは戦前後と現在でどう変化しましたか？逆に変わっていないものはありますか？

戦後、道路がコンクリートで舗装された。

しかし、役所と集落で話し合って、土盛海岸の自然は残した。

**Q6** シマで後世に伝え残したいもの、残って欲しいものは何ですか？

土盛海岸は手を付けなくて残してほしい。台風に備えるため、堤防を作る話があったが、集落の人たちの思いで、そのままの形で残した。自然のままの海岸が残っているのは、島内では土盛海岸と瀬戸内町の海岸だけだと聞いている。

<その他>

- ・ 大島高校では、日本復帰運動に取り組んでいた。
- ・ 映画館の入場料が大幅に値上げする話があったが、高校生を入れないようにするストライキを4,5か月行い、値上げを断念させたこともあった。



## 5 万屋集落

話者:肥後 安美(ひご やすみ)さん 昭和20年(1945年)生 80歳  
調査員:岩切 陽奈乃(2年),朝 陽菜(1年),登山 百々(1年)

Q1 主な経歴を教えてください。

- ・ 昭和 20 年に自宅で産婆さんにとりあげられた。
- ・ 奄美高校卒業後,東京の電鉄会社に就職。
- ・ その後,奄美に戻り,農業や漁業を行う。現在個人で黒糖製造に励んでいる。

Q2 シマで暮らして最も楽しかったり嬉しかった事は,いつ頃どんな事でしたか?

集落の人々との交流。当時の八月踊りは 2,3日かけて一軒一軒全てまわっていた。  
当時,集落内に 60~70 軒ほどの家があった。

Q3 シマで暮らして最も辛かったり苦しかった事は,いつ頃どんな事でしたか?

奄美で農業を行っていたが,安定した収入が得られず,不安定であった。  
また経費も掛かり,離島のハンディを感じた。  
ただ,貧しさで辛いことはたくさんあったが,悲観的になることはなかった。

Q4 外から見たシマのいいところと悪いところ

<よいところ>

- ・ 自然が豊か。
- ・ 全体主義であり,人情が深い。楽観主義である。  
都会ではなかなか人と人とのつながりを日頃から感じることは難しいが,奄美では集落全員が家族のように振る舞ってくれるので,その人情を残して行ってほしい。

<悪いところ>

- ・ 勉学を学ぶ場所や職場が少ない。
- ・ 農業に改善余地がある。(収入問題)
- ・ 産業の発展が乏しいので,もっと栄えさせたい。

**Q5** シマは戦前後と現在でどう変化しましたか？逆に変わっていないものはありますか？

<変化したもの>

- ・ 生活の状況が良くなった。
- ・ 前は自分たちでほとんど農作物を作り得ていたが、売っている物を買うようになった。

<変わっていないもの>

- ・ 奄美の伝統行事。形は変われども、今でも残っている。

**Q6** シマで後世に伝え残したいもの、残って欲しいものは何ですか？

伝統行事。形そのままに残していくのは難しいと思うが、活動は続けてほしい。

**Q7** 島口についてどう考えますか？

受け継いでほしいものの一つ。昔、学校で禁止されていたことが印象に残っている。

**Q8** 高校生や聞き書き活動への要望はありますか？(若い世代への要望等でも可)

聞き書き活動を続けてほしい。こういった機会があるおかげで、過去の出来事や伝統を受け継げるし、話していると思いが蘇る。

**Q9** 幼かったころの思い出の味や印象に残っている思い出は？

- ・ ソテツの実を使ってつくるナツガイ。黒糖で味をごまかしていたことが印象的である。
- ・ 主食がイモやサツマイモであった。米を手に入れることが困難であった。

**Q10** 島唄についてどう考えますか？

人生における教訓がたくさん詰まっている。

物事の教えを島唄で表現しているので、ぜひ多くの人に知ってもらいたい。



<聞き取った内容の掘り起こし作業の様子>

話者:岩山 ナス代(いわやま なすよ)さん 昭和20年(1945年)生 80歳

Q1 主な経歴を教えてください。

- ・ 万屋で生まれ育ち,北高へ進学。
- ・ 卒業後は製糖工場,花づくり,農業などの仕事を経験した。

Q2 シマで暮らして最も楽しかったり嬉しかった事は,いつ頃どんな事でしたか?

少年時代から青年時代。その頃は,道が舗装されておらず,少年団が中心となって朝から大きな鐘を「カンカンカン」と鳴らし,みんなを集めて作業をした。青年になってからは,よく青年団で浜辺へ行き,フォークダンスを踊ったのが楽しかった。

Q3 シマで暮らして最も辛かったり苦しかった事は,いつ頃どんな事でしたか?

貧困で苦しんだが,貧困なりに楽しかった。悲観的ではなかった。

Q4 外から見たシマのいいところと悪いところ

<よいところ>

- ・ 自然が豊かなところ。
- ・ 人情。昔のシマの雰囲気のお互い様の精神が残っているところ。良い人がたくさんいるところ。

<悪いところ>

- ・ 毎日のお金を稼げる収入源が少ないところ。
- ・ 若者が学ぶ場所が少ないところ。

Q5 シマは戦前後と現在でどう変化しましたか?逆に変わっていないものはありますか?

<変化したもの>

- ・ 生活の状態が良くなった。
- ・ 「集落全体が家族」という結の精神がなくなりかけている。

<変わっていないもの>

- ・ 集落行事は形が変わりつつあるが,今でも残っている。

**Q6** シマで後世に伝え残したいもの、残って欲しいものは何ですか？

八月踊りなどの行事は、昔のまま残すのは難しいと思うが、活動は続けてほしい。

**Q7** 島口についてどう考えますか？他集落との島口の特徴の違いはありますか？

- ・ これからも繋いでいってほしい。
- ・ 島唄の歌詞は島口が多く、とても良い物事の教えが込められているから聞いてみてほしい。例)「山の高せや風に憎まれる」意味:偉そうな態度をとっていると周りから酷評を受けやすい。

**Q8** 高校生や聞き書き活動への要望はありますか？(若い世代への要望等でも可)

このような話す機会があることで、私たちも「こんなことがあったね」と記憶が蘇るし、若い人たちにも繋いでいけるから、この(聞き書き)活動をこれからも続けてほしい。

**Q9** 小さい頃の思い出の味はありますか？

- ・ 主食は、お米は高いので芋だった。
- ・ 食べるものが少なかったので、ソテツやおおさ、芋づる、なりみそを作り、全て無駄にせず食べていた。



## <調査員所感>

○岩切 陽奈乃(2年)

私は、去年も聞き書きサークルに参加して、昔の奄美のことについてたくさん知ることができた。そのため、今年もより奄美のことについて知って、奄美の魅力を多くの人に知ってもらいたいと思い参加した。

今回、土盛集落の山口さんと山下さん、万屋集落の肥後さんと岩山さんにお話を伺った。私が今回お話を伺って印象に残ったのは、「島口についてどう考えていますか?」と質問した際に、昔は標準語しか話してはいけなかった時期があったということだ。私は昔の人は島口で話をしているイメージがあった。そのような時期があったことを知り、もし私がその時代に生きていたら、自分らしさがなくなって嫌だなと思った。自分たちの言葉を使えないということは、自分が育った島の文化などを否定されているような気持ちになると思う。昔の人たちが使えなかった言葉を、未来の世代とともに取り戻す営みが、奄美の文化を繋いでいくのではないかなと思った。

シマで過去と現在で変化したもの、変化していないものを伺ったときに、変わっていないものは結の精神と答えてくださったのが印象的だった。結の精神とは、助け合いの仕組みを超え、人々が育んできた心のつながりのことだという。私は結の精神という言葉は、奄美にとっても合っている言葉だと思う。それは、奄美では奄美の良さでもある心の温かさや地域の支え合いが活発だからだ。

また、シマで後世に伝え残したいものを伺ったときに、伝統文化である八月踊りや種おろし、浜下れを、時代に合わせて形を変えてもいいから残してほしいとおっしゃっていた。この言葉に深く心を動かされ、私自身も今後、奄美の文化や伝統を守りながら、自分なりの形で継承していきたいと強く感じた。今年の夏、私も八月踊りに参加するが、踊りを学ぶだけでなく、島唄を理解することで、八月踊りの精神を深く感じたいと思う。

私は、今回の聞き書きサークルの活動を通して、たくさんシマについて知り学ぶことができた。奄美の良さにさらに気づくことができた貴重な体験だった。

## ○登山 百々(1年)

私は万屋集落の肥後さんと岩山さん、土盛集落の山口さん、山下さんにお話をうかがった。私が特に印象に残っているのは、肥後さんと岩山さんの「生活は苦しかったが、悲観的になることはなかった」というお話だ。終戦後、奄美は伝染病である天然痘が流行ったり、若い人の勤める先が少なく、農業をしようにも収入が安定せず、貧しかったという。そのようななかでも、八月踊りや種おろしなどの人と人とのつながりを深める伝統行事を楽しんで「貧しいなりに楽しんでいた」と肥後さんはおっしゃっていた。

わたしはこの話を聞いて、シマならではの結の精神、人とのつながりの深さを強く感じた。当時の奄美にとって貧困は常に近い存在であったが、今の奄美ではそれを強く感じることは少ない。それは当時の奄美の人々の努力や、人を思いやる気持ちが今の奄美を作ったからだと思う。私はよく近所の人に果物や野菜をもらう。そのお返しにと祖父からもらう卵を渡している。このやりとりを今までよくあるものなのだと考えていた。しかし今回4人の方々からそれぞれお話を伺って、この関係を当たり前だとは思わず、感謝していると思った。

また、長い歴史をもつ八月踊りや種おろしなどの伝統行事は形が変わりつつあると、岩山さんはおっしゃっていた。岩山さんが青年期の頃、八月踊りは集落の家を一軒一軒3日かけて行われていたそうだ。また、八月踊りなどの伝統行事に参加する人が最近減少している。そのため、奄美の伝統や良さを知る人が減り、後継者も不足しているともおっしゃっていた。

このことを知って、私は奄美の人々が繋いできた伝統を途絶えさせたくないと感じた。このままでは、伝統行事や奄美の良さを知る人はどんどん減ってしまう。そうならないためにも、今奄美に住んでいる人たちが力を合わせていくことが大切だと思う。これからも伝統行事に続けて参加し、伝統を引き継いでいきたいと思う。



○朝 陽菜(1年)

私は、土盛の山口さんと山下さん、万屋の肥後さんと岩山さんにお話を聞いた。特に印象に残った話は、島口や方言を使う人が減少しているということだ。肥後さんの話によれば、日本復帰前の奄美は方言を使うことを禁止されていたという。方言を使えなくなり、標準語と方言が混ざった「とんくつ語」が生まれたそうだ。私は島口をあまり使わないが、山下さんと山口さんの話で共感したものがある。それは、熱いものを触ったときに標準語では「熱いっ」と言うが、方言では「痛いっ」と言うとおっしゃっていた。私も「痛いっ」と言うので、その話を聞いたときに「私が使っていたのは方言なんだ」と少し嬉しくなった。

岩山さんの話によれば、島唄には多くの島口が使われているという。その島唄の歌詞はとても深く、人が身につけるべき教えがたくさん詰まっていると話していらしかった。私は、この話を聞き、もっと島唄や島口、方言について知りたいと思った。また、島唄は方言や島口をととても楽しく、明るく伝える方法だと思った。だからこそ、島唄をみんなで歌い踊る八月踊りや種おろしなどの伝統行事に多くの人が参加すれば、島唄や島口、方言、伝統行事が、後世に繋がっていかかもしれないと私は考えた。

みなさんが島のよいところとしてあげるのは「人情」だ。都会では隣人のことを知らないのも当たり前だといわれるが、奄美では近所の人たちが協力し合っていることが日常である。奄美には「結」の精神があり、「集落の人は家族」という考えがあるが、最近はそれが薄れてきているように感じるとおっしゃっていた。奄美では助け合いながら生活しているということを私は日常的に感じている。だからこそ、そこが奄美の良いところなのだろう。

私は、島唄や島口、方言や八月踊り、種おろしなどの奄美の伝統行事や、いつも私がたくさん感じている奄美の人の良さを伝えていき、守りたいと思った。



# 地域文化・生活変遷たどる

奄美市新町の大島北高校(全川若狭校長、生徒146人)は25日、地歴科の課外として「聞き書きサークル活動」を行った。生徒1人がグループに分かれ町内5集落を回り、地帯住民に日本復帰の昔も、昭和と平成、令和の生活・文化の変遷を聞いた。記録は文化に起こし、8月に発行予定の冊子『マ(集落)に笑む』にまとめ、協賛した佳や近隣の小中学校などに配られる。

## 大島北 集落聞き書き活動

### 日本復帰の思い出も



シマの古者たちの話を真剣な表情で聴き入る生徒(25日、宇宿生活館)

奄美市集落へ向う6世帯、230人を訪れたのは、2年5回集落まわりの聞き書き活動。聞き書きは、1年の活動(10、11月の聞き書き)と、1月の聞き書き(10、11月の聞き書き)の2回に分けて行われる。聞き書きは、1年の活動(10、11月の聞き書き)と、1月の聞き書き(10、11月の聞き書き)の2回に分けて行われる。聞き書きは、1年の活動(10、11月の聞き書き)と、1月の聞き書き(10、11月の聞き書き)の2回に分けて行われる。

その後、当時の構成... 規模化が進んだが、生... 文化も伝統も... 20年で明らかにな... 関係も... 長崎市長曰く、長...

22団体に助成金交付 奄美市共同募金委員会... 奄美市共同募金委員会... 助成金交付式... 2024年度、共同募金... 総額400万円、前...

23年ぶり入館者80万人超え 外国人観光客の増加が要因... 長崎市長曰く、長... 入館者80万人超え... 外国人観光客の増加が要因...

募金は共同募金... 市社会福祉協議会... 市社会福祉協議会... 市社会福祉協議会... 市社会福祉協議会...



を受けた福祉活動団体などの代表ら

## あとがき

今年度の聞き書き活動は、南海上にトリプル台風が発生しており、その影響が懸念されるなか、何とか予定通り実施することができた。

私自身、この活動が3年目になり、振り返ってみた。本活動の成果は以下のようだろう。

### 1 奄美の良さや課題を発見

活動を終えた生徒の声を聞くと、奄美の歴史や文化・自然などについて、本活動で初めて知る事柄も多い。日頃の授業内では学べない貴重な学びの機会となっている。

### 2 地域貢献

取材内容等をHPに公開、また冊子として編集し近隣の教育機関等に配布している。

### 3 学びの応用

本活動の現地取材の方法等も取り入れて、本校の「総合的な探究の時間」（略称「総探」）の充実が図られた。また、自分の進路実現や進学後の学びに活用している生徒もいる。配布された冊子をもとに、児童に感想文を書かせる等している小学校もある。

### 4 地域との繋がりが増えた

総探活動と併せて、地域からの支援が貴重な学びとなっている。地域からも生徒の学ぶ姿勢に刺激を受ける等の声も聞いており、相互の信頼関係の構築にも繋がっている。

### 5 郷土愛の醸成

上記の学びや繋がりにより、生徒たちの心の中に醸成されている。

以上のように、本活動は本校及び地域において大変有益な活動であることを実感している。高齢化に伴う話者の確保の難しさや業務の負荷等の課題改善に努めながら、本活動が今後も更に魅力的な活動となることを願っている。

最後に、今回の活動にご協力いただいた話者の方々や各集落区長の皆様、地域と繋いでいただいた笠利総合支所地域教育課の永井課長補佐に心から感謝申し上げます。

2026年2月 大島北高等学校 教頭 吉留 文彦

大島北高等学校聞き書きノート 第11号 2025年度版

「シマ(集落)に学ぶ」～奄美の社会・文化遺産の継承～

2014年(平成26年)度初版発行

編集・発行 鹿児島県立大島北高等学校 聞き書きサークル

住 所 鹿児島県奄美市笠利町中金久 356 番地

電 話 0997-63-0005